曦
ユヒ
李良枝
Lee Yangji

幽熙

李良枝

講談社

由熙（ユヒ）

一九八九年二月一〇日　第一刷発行
一九八九年二月二八日　第四刷発行

著者——李良枝（イ ヤンジ）

© Lee Yangji 1989, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一二一　電話東京〇三—九四五—一一一（大代表）

印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——大口製本印刷株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-204303-3（0）（文1）

■目次■

由熙　5
来意　127
青色の風　233

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

由熙

（ユヒ）

裝幀・菊地信義

由

熙（ユヒ）

由熙の電話を切った時から、私は落ち着きを失くした。

机の上には処理しなければならない伝票や書類がたまっていた。しかし、仕事に全く身が入らなくなってしまった。

そのうちに、腕時計が四時をさした。

見上げると、会社の時計も同じ時刻をさしていた。

しばらくしてやり残していた仕事を始め、六時少し前にその日の仕事を終えるとすぐ身仕度をした。六時ちょうどに会社を出た。

走り寄ってきた空車のタクシーを呼び止め、乗りこんだ。タクシーが家の方向に向かって走り出すと、思い出したようにまた落ち着きを失くした。電話での由熙の声がまるで今話しているような鮮やかさで迫ってきた。タクシーが信号の前で急ブレーキをかけるごとに、瞬いた瞼の内側に由熙が現われ、走り出すとともに遠のいた。

タクシーを使って家に帰ることなど滅多にないことだった。一分でも早く帰りたかった。しかし、家までの道のりは、いつもより長く、バスに乗って帰る時よりも車が揺れ、止まる信号の数も多く感じられた。

会社を出てくる時、社長と同僚に挨拶をしてきただろうか、私はそんなことを考え始めた。ついさっきまでのことがよく思い出せない。時間からすれば数分前の、タクシーに乗りこむまでの自分のことがはっきりとしなかった。

寒かった。風も強かった。ソウルは春の日が短く、朝晩はまだ冬のように日中との温度差が激しい。ブレーキの音が前からもうしろからも聞こえ、からだがぐらつくたびに、バッグを抱え、背中を丸めた。

家の前でタクシーを降りた。

来た道の角の方に戻っていくタクシーを、私は降り立った同じ場所に立ちつくしながら見つめた。ごくわずかに傾斜しながら下がった坂道の左側の角の向こうに、タクシーが消えていった。

家の前の道に人の姿はなく、道の角からも人や車が現われ出てくる気配はなかった。今し方消えたタクシーの轟音もすでに聞こえなくなった。

記憶の中の由熙の声が、私の背中を突ついた。声そのものに滲みこんでいる視線の動きも立

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

ち現われた。声と、その視線に誘われ、私は振り返った。由熙が横に立っていた。坂道の上方を見上げているその横顔がはっきりと思い出された。六ヵ月前のある日と同じように、私は由熙と並んで立ち、うしろにある岩山の連なりを見上げた。

坂道は右にくねり、道に沿って続く人家が見上げる私の視界の下方で静まり返っていた。その上方に、岩山がそそり立っていた。丸みを帯び、ところどころ鋭く突き立ち、灌木を岩の間に繁らせている岩山の稜線は、下方の人家を包みこむように、あるところではのしかかるようにも続き、一つ一つの岩肌を夕暮れの春の風の中に晒していた。凛とした静けさは、星のない重たげな空全体に広がり、岩山の周りの空の色は薄くぼっと輝いても見えた。

視線は、過去のある日と同じように一番高いところに位置する岩の表面に引きつけられた。

——바위(バウィ)(岩)

由熙の声を思い出し、その発音を真似るようにして私は呟いた。ウィの音を強調し、ことさら正確に発音しようとしていた由熙の、かえってぎこちなく聞こえたその声が蘇えった。

風は冷たく、険しさを感じるほど、刺々しく強かった。手を交差させ、両腕を抱いて慄えている自分の姿も、六ヵ月前の、冬に近づいていた日の自分を思い出させた。あの日、この坂道の少し下で、厚手のカーディガンを羽織り、その端を引っ張りながらカーディガンをからだに巻きつけるようにして私は立っていた。風もやはり冷たく、刺々しかった。

向き直り、また人気のない坂道の角の方を見た。いつまで立っていても誰もそこからは現われてきそうになかった。

由熙は、この国にはもういないのだ。

そしてこの家にもいず、この道に現われることもない。

風の中に立ち、道の角を見つめているうちに、自分がようやく落ち着きを取り戻していることに気づいていた。

低い石の段を上り、鉄扉の横にあるチャイムを押した。

――ヌグセヨ？（誰ですか）

インターフォンから叔母の声が聞こえた。

――チョエヨ（私です）

叔母の、小さな機械の中で響きを変えた声に向かって私は答えた。

家の中にあるインターフォンのボタンが押されると自動的に鉄扉の鍵が開く。金属を叩くような音がして鍵が開き、鉄扉を押すと小さな庭が現われた。私は中に入り、鉄扉を閉めた。余韻を聞き取り、道の方にやはり人が歩いてくる気配がないことを確かめるようにして、まだ少し立ったままでいた。

玄関口に続く石畳の右側には花壇が作られていた。左側には以前犬小屋があったが、由熙が

この家に住むようになる少し前に犬が死んだ。今は犬小屋は取り除かれ、木の台がそこに置かれ、空の植木鉢がいくつか積み重ねられていた。

外とは違う匂いが、小さな庭に入った時から辺りにたちこめていた。その匂いで、自分が住んでいる家に帰ってきたことを今更のように思い、匂いに敏感になっている自分に気づいて戸惑いもした。

肩のうしろ辺りから、イイニオイ、と遠い日に呟いた由熙の日本語の声が聞こえてくるような気がした。

叔母がいるはずの居間の窓には明かりが点されていた。しかし、玄関口の右側に続く応接間のサッシ戸も、玄関そのものも暗かった。

二階を見上げた。石の手摺りの向こうにベランダがあり、二つの部屋の窓が並んでいた。右側の私の部屋の窓も、由熙がいた左側の部屋の窓も暗かった。家全体の暗さが外の闇の中に沈み、一層重たげに庭を覆い、いつもより静けさが広がっている家の周りを何度も見回した。

私であれ、由熙であれ、インターフォンで返事をしたなら、叔母は必ずと言っていいほど先に中から玄関のドアを開け、私達を迎えてくれた。応接間は明るく、玄関口の外灯もそんな時はいつも点されていた。しばらく前から叔母は左膝を痛めていたが、それでも手が空いてさえいれば先に中からドアを開けてくれた。昨日までそうだった。

叔母は居間にいて、居間の電気だけをつけていた。中からは声も聞こえてこなかった。手が空かず、玄関に出られない時は決まって外に向かって名前を呼びかけてくるはずの叔母の声が、いつまでたっても聞こえてこなかった。

玄関のサッシのドアを開け、

——ただいま。

と私は言った。サッシを縁どった金属とコンクリートの地肌が擦れ合い、ギイッ、ギイッ、と音をたてた。その音がいつになく耳に障った。暮れきろうとしている家の上に広がった空の、それでもまだどことなく薄青さを滲ませている色も、風の冷たさも、そしてドアの擦れ合う音も、季節感を越えて由熙を真近に思い出させてくるようだった。暗い家の中の静けさも私の胸を刺した。

やはり、叔母は居間にいた。

だが応接間との間を遮ぎっている居間の戸口のカーテンは閉ざされたままだった。

ソファにバッグを置き、叔母を呼ぼうとしてためらった。手持ぶさたと妙なうしろめたさとで棒立ちになったように立ちすくんだ。ソファの肩に指先を当てた。そこに線を描きながら指先を動かした。厚いソファの布地の中に指先に力を入れてくいこませ、離してはまた線を描くことを繰り返した。

叔母の沈黙が続いていた。カーテンが開くのを待ち、叔母の声が聞こえるのを待った。二階にすぐにでも上がっていきたい衝動にかられたが、そのたびにソファに指先をくいこませた。

——由熙は一時過ぎに出て行ったわよ。

ふいをつかれ、私は戸惑った。見るといつの間にか叔母がカーテンを開け、居間の戸口に坐っていた。少しの間、何故そうして棒立ちになっていたのか、自分でも忘れていた。叔母は新聞を読んでいたらしい。手にしていた老眼鏡を、そう言ったあとでケースにしまった。叔母のうしろに、床に広げられた新聞が見えた。

——あなた、由熙がどんなに淋しい思いをして飛行機に乗ったと思うの。

語気は激しかった。この家の庭に入った時から、家の暗さですでに叔母の咎めを受けているような心地にさせられていたことを、私は他人事のように思い返し、わけもわからずに深い溜息をついた。叔母には言い訳する言葉がなかった。応接間や玄関の暗さの中に、はかなく、冷んやりとした慄え出しそうな空洞感を嗅ぎとった。

——早びけするって、空港にはきちんと見送りに行けるし、会社にはもう許可を取ってあるって、あなた昨日までそう言って約束していたくせに、今朝になって急にだめだなんて言い出すのね。電話もしてこない人なんてどこにいますか。お昼休みの時間だってあるじゃないの。何て薄情なの？　いくら待っても電話がないから、由熙に、ここから会社に電話してみたらっ

て言ったのよ。でも空港に着いてからオンニ（おねえさん）には電話を掛けますって言ってたわ。電話はあったの？

私は黙りこくったまま、首を前に振り、頷いた。

――かわいそうでたまらなかったわ。私が送っていくって言ったのよ。重い物は持てそうもないけれど一緒に行ってあげるって。でも由熙は断わった。あの大通りまでは行くって言ったの。タクシーに乗るところまでは見届けたいと思ったから。でも、坂道の角のところで、あの子、もうここでお別れしますって言って、私を家に帰そうとするのよ。ようやく膝が治ってきたのだから、こういう時こそあまり歩かない方がいいって、あの子はそう言ってひとりで行ったわ。アジュモニ（おばさん）、アンニョンヒケセヨ（さようなら）って、私の手を握って、私を抱いて、何度も振り返りながら歩いて行ったわ。

ソファの肩に、指先をくいこませた。

同じそのソファに、由熙はこの家に初めてやって来た日に坐った。今もそこにいて、自分が由熙の頭と肩を、うしろから見下ろしているような錯覚に捉われた。

――最後までしてあげられるだけのことはしてあげなくちゃあだめよ。本当のきょうだいみたいに仲が良かったんじゃないの。見送りに行くのが当然だし、電話だけでも掛けて来るのが当たり前だわ。あの子をひとりぼっちで空港に行かせることになるなんて、考えてもいなかっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co